

『わたしもつながっている』(ヨハネの福音書 15 章 1-11 節) 2020.6.14.
<はじめに> ぶどうの木を例に、主イエスと私たちクリスチャンとの関係が描かれています。美しい描写は私たちに印象的に語り掛け、絵画やさんびかにもなっています。これを語られたのは、主の十字架の前夜、間もなく主と弟子たちが引き裂かれる直前でした。

I ぶどうのたとえ

①旧約聖書に見る

ぶどう園のぶどうは、栽培に適した野生種を植え替え、良い実をならせる枝を接木して作られます。詩篇 80:8-9、イザヤ 5:1-7、エレミヤ 2:21 には、イスラエル民族をエジプトから引き出して、神の民に育てようとされる父なる神の御思いと現状が描かれています。

②新しいぶどう畑(1)

まことのぶどうの木なる御子イエス・キリストは栽培に適した台木です。台木に慣れなかったイスラエルの代わりに農夫なる父なる神が備えられ、そこから新しい神の民を育てようとされています。そこに私たちが選ばれて、枝として継がれたのです(5)。

③わたしがあなたがたを選んだ(16)

私たちがキリストと結び合わされたのは、主が選んでくださったからです。御父なる神が私たちに可能性を見出して、キリストに接木されました。私たちがその選びを受け取り、同意したからです。今も私たちは選んでくださった方を信頼し、期待しているでしょうか。

II いのちのつながり

①結実を期待される

8 回「実を結(ぶ)」が出て来ます。ぶどう畑はそのために作られました。ただ実を結ぶだけでなく、もっと多く実を結び(2,5,8)、その実が残ること(16)を期待されています。主が私たちに期待される結実があります。何でしょうか(ガラ 5:22,エペ 5:9,ヘブ 12:11,ヤコ 3:17)。

②生命的関係の結果

結実の条件は「とどまる(新共同訳:つながる,NASB:abide)」で、11 回出て来ます。接木はまず枝を幹に固定することから始まります。本来つながりのなかった両者に生命的交流ができるまで密着させます。だから、つながることをより重要視されています。

③生命的関係の深化

つながりは物理的な近接から始まります。集まることを大切に出来た教会の意義はここにあります(使徒 2:43-47,ヘブ 10:25)が、ゴールではありません。大切なのは、ことば(3,7)、愛(9)、戒め(10,12)、喜び(11)が通い合う、生ける主とのいのちの相互交流です。

III わたしのことば

①きよめることば(2, 3)

「あなたがたは…すでにきよい」は 13:10 を想起させますが、むしろ「刈り込む」(2)を受けています(脚注・直訳)。実を結ぶ枝と結ばない枝、双方に刃は当てられますが、当てる部位と目的が異なります。主のことばで気づき、我が身を委ねる者を目的へと整えられます。

②とどまることば(7)

ことばはいのち(ヨハネ 1:3)です。ことばは権威であり、受け入れる弟子(8)を育てます。主のことばが私たちに流れ込むと、欲するものにも主の御思いが反映されます。だからそれはかなえられ(1ヨハネ 5:14-15)、それによって御父は栄光を受けられます。

③わたしもつながっている(4, 5)

この箇所を読むと、つながる私たち側が主に「とどまる」ことに目が向きがちです。しかし、主は「わたしもどまります」と宣言されています。私たちを選ばれた方は、私たちの手が緩む時にも、力強い御手で握り締め、今もこれからも支え導かれます。

<おわりに> 集まることの難しい中で、私たちは主から引き離されたように感じているかもしれませんが、この機会は主との霊的・内的ないのちのつながりに目を向けるようにと、主は語っておられます。接木された枝もしっかりつながれば、幹と一つになるのです。(H.M.)